

り一時之を免れしも又々波浪の強くして風下の一氷塊に觸れんとせしかば上風に脚躡するの不安全なることは固より之を知るも、さりとて又他に此氷塊を避るの手段もあらずりに因り餘儀なく一の小口を求め其内に入りて帆を盡く捲上げ氷鉤を以て艦を氷塊に繋ぎ留めたるなり我々は則ちディスカペリー號の此危険なる位置に陥り居るを丁度此日の正午頃に見たりしも時々南東よりの強颯は益々氷を北西に追ひ遣りて我か艦とディスカペリー號との間に横たはれる氷脊をして益々増大ならしめ加ふるに天氣は午後四時半頃より驟密となりしかば遂に之を見失ふたり然れども力の及ぶ限は之を助けんと欲したりしかば氷塊の縁邊に接して進行し半時間毎に大砲を放ちたりしも更に應砲を聞かず仍て我々は一時非常にディスカペリー號の安否を氣遣ひしが漸く九時頃に至りて同號よりの應砲を聞きたり斯くて同號は間もなく一條の航路を推開きて進み來りしが我々に告げて曰く風向の變化したるが爲めに氷塊二つに分れしかば直ちに各帆を展して其間を貫き來れりとは是に於て今後取る可き針路を決定すると肝要なりければクニク艦長は工匠數名をディスカペリー號に遣はして同號の蒙りたる損害を檢査せしめしに工匠等は其夕刻歸艦してディスカペリー號の受けたる損害を修理するには三週間を要し且つ港に入らざれば之を修理すると能はずと報道せり去る程に今は斯く氷を以て充たされたる海洋を冒して北進せんと企つるも又兩大陸に近づかんとするも到底無益なりければクニク艦長も茲に斷然ゴール艦長の言を容れて北方航路發見の目的を廢し先つアワツカ灣に至て同處に艦艀を修理し冬期前に於て日本の海岸を探究するとに決

したるか此時兩艦の人々は之を聞かや一人として喜色を満面に顯はさる者はなかりき蓋し此時は我々の故國を辭してより既に三年千難萬險を冒して其探檢に従事したるも遂に目的の航路を發見するの望なく既に倦厭の心を生じたる折なりしが今我々のクローク艦長の此決心を聞くや否や既に故郷に歸りて朋友親戚に相會ふの思をなし喜色の自然満面に溢れしも道理なりけり

同月三十日の夕刻霧霽れてプリンスマフウェルズ岬を南微東凡そ六「リーグ」に視たり仍て我々は此時針路を西に轉じたるが八時を以て東岬を認め十二時の頃には同岬を距る四「リーグ」の處に達したり然るに此時よりクローク艦長は病勢俄に草りて重き枕に就きしかば余を招きて余に今後各士官を指揮すべき旨を命じ而して各士官にも亦其旨を傳へしが又アワツカ灣に向ふて針路を取るべしと令せり

斯くて其翌月即ち一千七百七十九年八月二十二日午前九時に至り艦長クローク氏終に逝けり氏は英國を出る前より既に肺病に罹り航海中にも之が爲めに絶えず惱まされて身軀次第に衰弱せしかば皆之を憂へしも氏は常に神色自若として運を天に任せ死に至るまで精神活潑なりき氏は幼にして海軍に入り千七百五十六年の役にも數回出陣し殊にペロナ艦とコラマ艦との間に起りたる戦闘にはコラマ艦の後橋に居りて橋の倒るゝと同時に水中に落ちしが幸にして生命には恙なかりし其後艦士候補生となりてドルフィン號に乗組みバイロン代將官に隨ふて初めて世界を周航し次て亞米利加海嶺の勤務となり千七百六十八年航海師副となるやエンデボリア號に乗組みて第二の世界周航を爲し其遠征中に登用せられて艦

士となり其後又レンジャーイション號の二等艦士となりて第三の世界周航を爲し千七百七十五年其航海を終へて歸るに及び間もなく准艦長同位の航海師に昇り今回遠征準備の命下りし時デイスカパリー號の艦長となり公克艦長の死するに及び之に代りて遠征の兩艦を督したり乃ち此時より身軀の健康急に傾きて北方凜冽の氣候に耐ふると能はざりしも其精神は毫も之が爲めに屈せざりき去れば氏も温暖なる地方に歸るにあらざれば到底其身の健康に恢復の期なきことは能く之を知ると雖も一意唯其職務を重んじたるより其生命を輕しとして航路の搜索に従事し兩艦總士官の説を聞き始めて艦を回せしなり嗚呼忠誠斯の如き士にして三十八歳の壯齡を一期とし終に天涯萬里の洋中に客死すとは天命なりと雖も悼惜に堪へざるなり是に於て余はウイリアムソン氏をしてデイスカパリー號に遣りクローク艦長の死を報せしめたるにゴール艦長は此時書をウイリアムソン氏に托して余に命ずる所ありき即ち其言に曰く成る可くデイスカパリー號と同伴して進行せらるべし若し途上に於て相分かるゝことのあるには力を盡してセント、ペーター、エント、ポール港に到りて相會することせんと

二十四日我々は前艦長の遺骸を載せざるの故より旗章を半橋に掲げてセント、ペーター、エントポール港に入りしに間もなくしてデイスカパリー號も亦入港せり

二十五日の朝ゴール艦長は前艦長の死去せしより自らレンジャーイション號の艦長となりて余をデイスカパリー號の艦長に命じレンジャーイション號の航海師副ランヤンを擧げて艦士となしバルチイ及リツクマ

ン艦士をアイスカパリー號より取りてレンソリューション號の第一等及第二等艦士となし而してウイルリアムソン艦士をアイスカパリー號の第一等艦士となせしが又ゴール艦長は四名の艦士候補生をアイスカパリー號に連れ行くことを余に許したり是今年の曆書を有せざるを以て天測を爲すには是非此等四名の助力を要するが故なり尤も兩艦に於て天測を續行せん爲め余の代りとしてレンソリューション號にはパイライ氏を轉乗せしめたり又ゴール艦長はアイスカパリー號を修理する爲め數名の工匠を送りて同號の工匠を助けしめたり去れば是等の工匠は同號前艙の貯品を遠ざけ艦の前部を輕ふして其左舷の艦底より銅板の損ぜしものを取除かんとして横鐵材の下なる第三層板の三呎許撞き崩されて其内部の木材の跳ね出でたるを發見したるに因り此修理の工事を爲さんが爲め其人員を入れるべき天幕を陸上に建て一隊を内地一哩の處に遣りて木材を伐らしめたるが又村の西端には天文臺を建て、其傍に一の天幕を張り其内はゴール艦長と余と居住したり

我々は艦底の銅板を剝して其剝す程愈々艦艀の腐蝕せるを發見したるが今は季節も大に進みたる事なれば少しの遲滞もゴール艦長の探究事業に妨げとならんとを恐れしかば余は工匠に命じて氷の爲めに受けたる損處を修理するに必要な丈の銅板よりは餘の銅板を剝さしめざりき八月二十九日曜日午後我々はクレーク艦長埋葬の式を舉行したるが即ち其次等は兩艦より先づ凶砲を發し艦長の遺骸は兩艦の士官及水夫一同列を正して港の北側なる溪谷中の高地上に護送して一樹の下に之を埋め一同稍や暫く其墓

前に於て讀經をなしたるが其終るや海兵は三回の發砲を爲したり蓋しゴール艦長の此地を見立て、斯く埋葬したるものはクレーク艦長の生前より豫て陸地に其身を埋めんことを望みしが故なり又此地には病院及倉庫等もありて露國の僧徒も一名の紳士と共に葬禮の列に加はりて讀經し鎮臺在勤の露細亞人も亦盡く會葬して最と鄭重に吊ひたれば亡靈も定めて地下に満足せしならん

九月二日工匠は腐朽又は毀損せる板を取替へ又左舷の底板を修理して後ち氷の爲めに損したる右舷の底板を剝取りたるに此處にも亦横鐵材の下部の板に三呎許は是非とも取替へざる可からざる處を見出したるに仍て之を取替へしに因り艦底の修理は全く三日に之を終りたるが又舵鉤の鉛の全く磨耗したるにより之を修理せん爲め舵を外づして陸に送りたり斯くて八日にはレンソリューション號も亦氷の爲めに破損せられたる涙除けを修理せん爲め滾上に曳上げしを以て今回は我艦より工匠を送りて其修理を手傳はしめたり

今はレンソリューション號の損處も其修理盡く成りて食料等の積載も亦終りたれば十一日を以て滾より挽き出し十五日を以て出港したるが二十二日は我が國王陛下即位の當日なるを以て二十一發の祝砲を放ち兩艦ともに盛宴を張りて遙に國王陛下の萬歳を祝したり

夫より其年は事なく過ぎ翌年即ち千七百八十年一月二十日プロ、コンドルに着したるが同處は同月二十八日を以て抜錨せり而して夫よりバンカ海峡に向進したるが之を通過したる後はサンダ海峡に向ふて進

行せり二月九日七ヶ月前に歐洲を出で、三ヶ月前に喜望峯を出帆したりと言へる一艘の荷蘭軍艦に出會ふたるが我々は此艦より佛、西兩國の同盟して我か英國に向ひ戦宣を公布したることを聞けり又該艦は告て曰く喜望峯を出帆せんとせし際にはサーエドワートフニ氏軍艦一分隊と東印度船一隊とを率ゐて既に該岬を守護し居たりしと十一日フアンズ島に碇泊しランヤン艦士と測量師とを上陸せしめて汲水す可き地を檢せしめたり此ランヤン氏は千七百七十年公氏に隨ふて此島に來りしことありし人なり我々の此島に碇泊すると間もなく土人は大なる鳥及海龜等を夥しく持ち來りたり此日艦底を掃除して出帆に差支なからしめ十九日北西の順風に乗じてサンダ海峽を通行したるが翌日フアンズ島は見えずなりぬ四月七日陸地を認めたるが夫より二日を経て一船あり我々の方に進み來れり何國の船ならんと思ひしに三日前にテールナル灣を出帆したる我か英國の東印度郵船にして即ち我か支那艦隊及其他印度船に傳る所の命令書を携へて洋上を巡航せるなりき我々は此時此船より佛國の一分艦隊三週間前に喜望峯を開縦して我か東印度艦隊を搜索せん爲めセント、ヘシナ附近を巡航せりとの事を聞きたり我か艦は颯風の爲め二十二日までフアンズ灣に到着すると能はざりしが其日の夕刻漸くシモン灣の對面に至りて投錨せり東印度通の商船ナソウ、サウサンプトンの兩號此に碇泊して歐羅巴に赴くの護送船を待ち居たりフアンズ灣より祝砲十一發を放ちしに砲臺より同數の答砲をなせり十五日ゴール艦長と同行してクープ、タウンに至り翌朝同地の知事ブレランバーク男爵に謁し非常に鄭

重なる響應を受けたり斯くて既に食料其他の準備も充分に整ひたれば五月五日を以て此灣を出帆し六月十二日を以て赤道を經過せり此航海中に於て四回目的の經過なり八月十二日ゴール艦長の計畫に従ひアイルランドの西海岸に達して航海日誌及地圖を倫頓に送付せんとせしが何分該港に達すると能はざりしを以て餘儀なく強き南風に乗じて北方に進行せり次でロウ、スウィルリーに赴かん目的なりしも風尙は同方向より吹きしかばレウイス島の北方に進み行き八月二十二日午前十一時に至り兩艦俱にストロムチツスに入りて投錨せり此時余はゴール艦長の命を受け先づ海軍本部に至りて兩艦の到着を報じたるが十月四日兩艦恙なくノールに到着せり初め英國を開縦せしより今日に至るまでの年月を數ふるに實に四年二月二十二日なり余がストロムチツスに於てデイスカバリー號を辭し去りし時には同號は總員皆健全にしてフアンズヨシヨシ號にも其患者は僅に二三名ありしのみ而して其中に於ても勤務に堪へざるものどては全く一名なりき又此航海中病死者はフアンズヨシヨシ號に五名ありしが其三名は初め英國を開縦せし時より既に其健康を失ひ居りし者なりデイスカバリー號には幸にして此長日月中一名の病死者もなかりき既に前章にも畧は列擧せる如く極地の探航者は古來其人に乏しからずして獨り公氏のみにあらずと雖も世界周航者としては我か英國は勿論他の國に於ても余輩未だ公氏の如く世に有名なる人傑を見ざるなり又他の探航者は從來人の知らざる陸土及島嶼を發見するも其位置等の確測に至ては概して之を爲さざるもの多し然るに公氏は獨り之に反して陸土を發見する毎には必ず先づ其島なるや否を決定し而して時と

事情との許す限りは海圖上に於ける位置をも必ず之を測定せり蓋し公氏は己の至りたる海岸及海洋を學術的及秩序的に測量し又己の踏みたる陸土及島嶼中に棲息せる人類を人種學的に記載せんと欲するに銳意なりし人なるが故に夫の發明者たる虚名を博せんと欲するが如き卑劣の念は毫頭も其心中になかりしなり

夫れ余輩は我が英國に古來偉勳盛功を以て我が海軍歴史を照したる人傑の少なからざるを知る者なり然りと雖も勇敢精練の航海者として又忠實、堅忍なる海軍士官として公氏の如く世に名聲を博し國人の歡心を得たる者は他に未だ其一人あるを知らず嗚呼氏の如きは眞に海國男兒と謂つべき人にあらず乎

ケビテン
クローケン
世界三周航實記終

跋

世の英國に遊ふもの海軍の整備せるに感嘆し航海の鍊達せるに驚駭し植民地の廣大無疆なるを稱揚涎羨すと雖も遠く前代の江源に遡りて其誰か此域に到らしめたる乎と討するもの稀なり又獨國を説くもの俾斯麥の偉政治家たるを景仰し而も現世紀の一俊傑なりと尊推すと雖も其獨乙聯邦の大經綸を創唱せる普温斯多因の鴻計を語るものなし蓋し俾斯麥固に一世の好漢ならざるに非ずと雖も然れとも俾氏はたゞ須氏の指畫に沿ふて布行せるに過ぎざるを奈せん今日英國に於ける海軍航

海植民等の事業瞳々焉として昇揚し光威八荒を映射すと雖も其源を究竟するに實に彼の計比天公克の世界三周大雄航に基せる也近日水交社諸君相謀りて其紀事を上版せんとし余に示さる余豈一言無るへけん乎嗚呼公克亦人傑なる哉

夫れ船舶機關整備せる今日と雖も鰐浪鯨濤を横截して四海八荒を極め單身險艱を冒すは猶未だ易々然とせざる所然るに片帆竹葉の如き一小木舟の時代に於て彼の公克飄々然蕩々然と萬疊の波浪を斬り去り瘴霧を排し毒烟を掃ひ魑魅を叱し蛟鰐を撻ち深く人跡未到の蠻地

を踏破して幾多新乾坤を發見し大塊球上を周邏すると三回に及ぶ抑も之を勇敢邁往と謂はん乎壯猛雄烈と謂はん乎將亦滿身渾膽と謂はん乎之を孰れにせよ其生死を天の冥命に委ね一身を事業に献じ千辛万難夷然として疑はざるの剛腸丹誠に至りては焉ぞ神泣き鬼哭せざるを得ん耶而して健膽彼れの如きは誠に以て海軍人及び航海者の範摸となすに足る今日の英國は世界無比の海軍國にして航海王の稱を博し且つ廣大無疆なる植民地を控ぬ女王陛下の屬籍には日も没せずといふと雖も十八世紀上半の期にありては實勢未だ振はず特に海

軍的思想の發達の如きは頗る踳躅の觀なきにあらざりしも公克一たひ蹶起してより以來此等の思想俄然振興發達し其航路の占取を以て國策となさざるべからざるを感認せしは實に一千七百七十年代也公克の功亦偉大ならず哉之に由て之を按するに世の先達者若しくは創起者の功は譬は猶ほ磔を把て水中に投する如とし其聲蒼然として響き池面忽ち波を揚げて汀渚の魚鱗を搖蕩し餘響更に千紋万皺を作りて美觀を呈すと雖も之が美觀を呈出せしは磔其物にあらず水其物にあらずして投磔者其人にあるなり故に事業の功は之を繼續して美

成せる人よりも寧ろ創唱先起して磔を把て投せる人を以て勳勞の第一位に置く嗟呼我國今日誰か能く此等第一の勳功を策するものぞ見よ我國今日の形勢は恰も英國に於ける十八世紀上半期の形勢に彷彿たるにあらずや若し夫れ此時に際し我國に公克出て而して先鞭を着けよば余は此人を以て我國海軍航海植民等の水上に磔を投して美瀾を呈出せし勳勞者なりと推舉するの勞を惜まざる也我國海軍人及び航海者たるもの蓋そ公克を以て自から任せざる夫れ人生は自ら涯際あり是を以て氣四海を吞む英傑兒

と雖も能く事の成功を一生に期すること難し今我國に公克の出つることありとするも我國は直ちに英國たる能はざること猶ほ十八世紀の上代に公克出て、十九世紀に始めて英國あることとく事業成功の遼遠なる眞に然る也故に其事業を一生の間に完成する能はずして假令刻苦の申に斃已する人ありと雖も其立礎の勞は決して死せざるものなるを以て第一の勲勞と此等の人を獻するは國家の明正なる條義とす彼の露國や西比利亞を自國の版籍に歸するを得しは英佛同盟軍の支那を征するに際しイクナチーフ之間に周旋して遂に多年の渴

望を充たしめしとはいへ抑も此策たる是より先き中將ムラヴ井ヨフの碎肝經營せる方略なるを以て他日功を論じて歴山帝第二世はムラウ井ヨフ中將と首勲とし之に賜ふに黑龍江伯の榮爵を以てせり他日若し我國に公克出つるも亦此の如くせざる可らざる也余は惟ふ今日此紀事を上版する焉そ公克を我國に喚起し以て我國を全世界の霸王たらしむべきを促すの意にあらずとせん耶

壬辰の秋九月下澣麴街至誠無息房に於て

稻垣滿次郎識

有姓名
川上之

小牧實繁

昭和十三年十一月二十七日
小牧實繁

明治二十六年二月七日印刷出版

正價金四拾錢

發行者

大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

愛敬利世

京橋區四組屋町二十六番地

印刷所

秀英舍

京橋區四組屋町廿六七番地

東京日本橋區本町三丁目

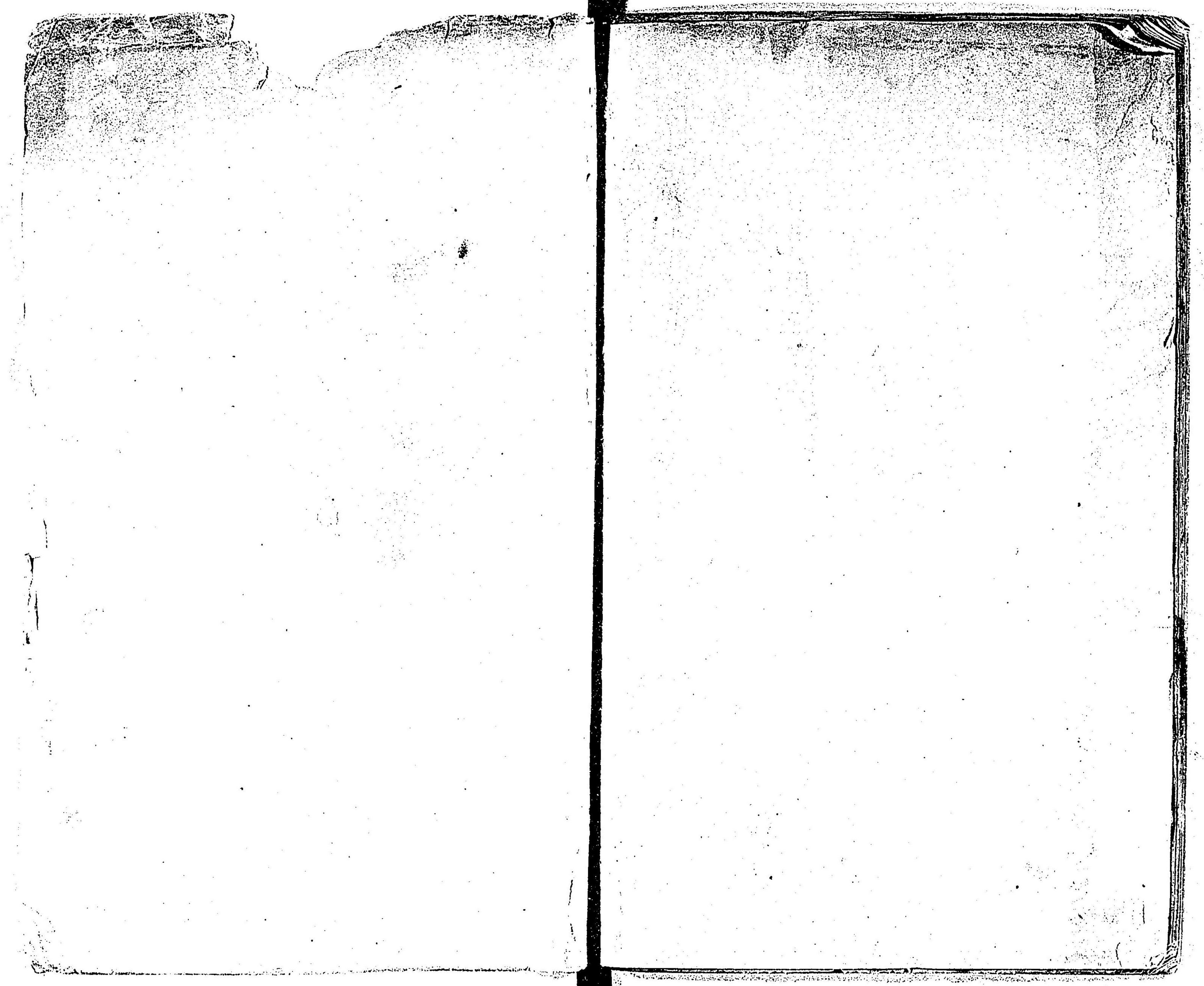
發兌書林

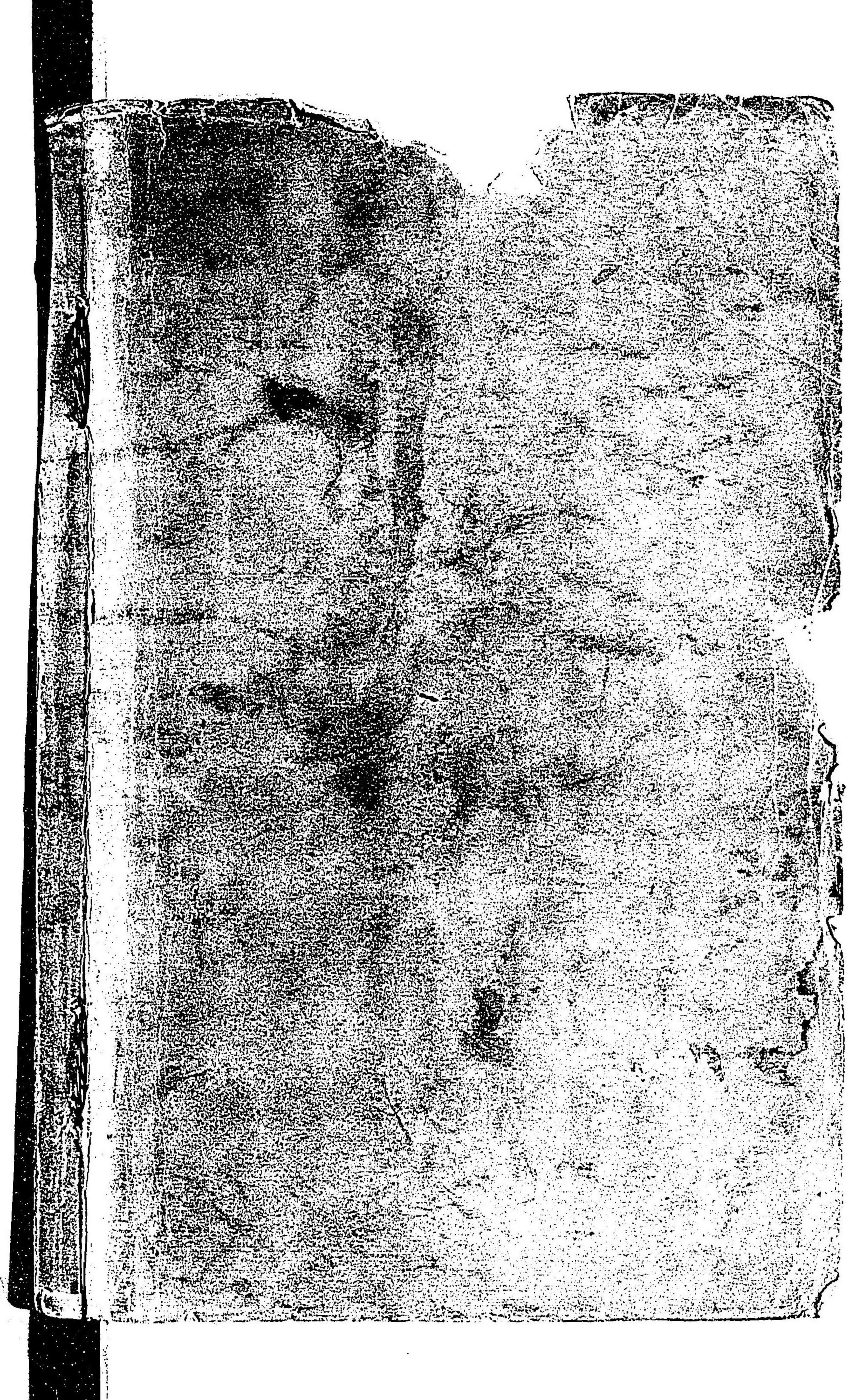
博

文

館







東京 博文館藏版

海軍水交社譯

022055-000-8

290.9-cC77AS

世界三周航実記

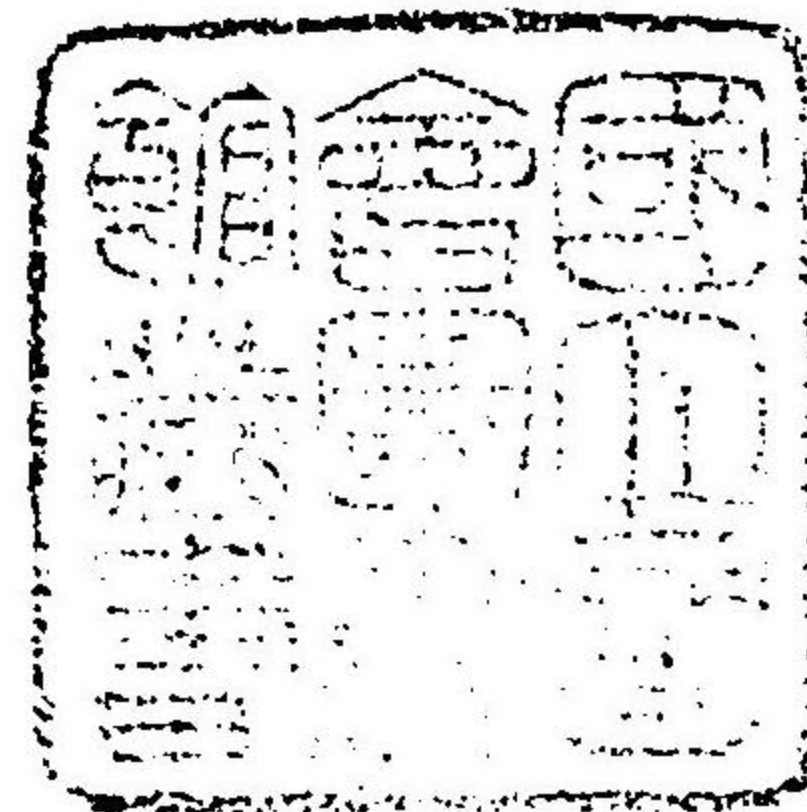
海軍水交社／訳

M26

ADA-0397



290.9
CCMA
S



218931 L^a